

柏木教会月報

6月号

東京都新宿区北新宿3-1-18

☎03-3368-2156

牧師 大浦 勝

罪人を招くために

マタイによる福音書九章九～二三節

牧師 大浦 勝

イエスがその家で食事をしておられたときのことである。徴税人や罪人も大勢やって来て、イエスや弟子たちと同席していた。（一〇節）

キリストは徴税人のひとりマタイを招いて「自分の弟子とされた。「わたしに従いなさい」（九節）。当時のユダヤ人の間では、徴税人は汚れた者とされ、不正をおこなつて私腹を肥やしていると非難され、厳しい取り立てによって同胞を苦しめていると嫌われていた。彼らは「罪人」と呼ばれている人々と同じように、ユダヤ社会の正当な構成員とは見なされず、会堂への出入りを禁じられ、どんな事件についてであれ、彼らの証言は無効であるとされていた。そして、人々は可能な限り、彼らとは接触しないで生活しようとしていた。

人々から排斥され、交わりを拒まれ、社会の正当な一員とは見なされないとすることは、人の心に深い傷を与える。人は自分の生きている意味も、自分のいるべき場所も見出しができないまま、深い恐れと言い難い不安の中を生きることになる。傷を受けて苦しんでいる者に必要なのは癒しである。キリストは人の心にあるこの傷を癒す医者として来てくださった。キリストはそれをご自分の当然のつとめとして、病人を招いて癒しを与え、

失われていた者を見つけ出してみもとに引き戻してください。

キリストはマタイと一緒に食事をされる。その席には徴税人や罪人が大勢集まっていた（一〇節）。食事は空腹を満たすためにだけ行われるものではなく、神が与えてくださったものを感謝と讃美の祈りをもって共に受け、共に神の恵みの約束の中にある者であることを認め合い、互いをそのような者として受け入れる場であった。だからこそファリサイ派の人々はつまずいたのである。

「なぜ、あなたたちの先生は徴税人や罪人と一緒に食事をするのか」（一一節）。このようにキリストは来てわしたちを食卓に招き、わたしたちをご自分との交わりの中に受け入れてくださる。キリストにおいてわたしたちの傷は癒され、わたしたちの罪は赦され、わたしたちは神の国の一員としての確かな場所を得ることができる。

「わたしを見た者は、父を見たのだ」とキリストは言われる（ヨハネ一四・九）。徴税人や罪人を招いて一緒に食事をされるキリストのみわざの中に、神ご自身の憐れみが現れている。神の憐れみはわたしたちの予想を超えて大きく豊かである。キリストは人々が設けていた境界線を越えて行動された。そのようにしてあってご自分を人々の批判にさらされた。「見ろ、大食漢で大酒飲みだ。徴税人や罪人の仲間だ」（マタイ一一・一九）。神の憐れみは大きく豊かだからである。神はわたしたちに憐れみを注がれると共に、わたしたちに神の憐れみをもって行動することをお求めになる。「わたしが求めるのは憐れみであつて、いけにえではない」（二三節）。